

会員の出した本

『戦時下の日本——昭和前期の歴史社会学』

(行路社、一九九二年)

本書は、戦時下日本研究会の一五名による共同労作である。欧米における歴史社会学の隆盛に触発されながら、昭和前期という日本人の「最も切実な体験の時代」を対象としたものである。民族、人口、行政、文化、女性、宗教の六つの領域に二、四のトピックスが

配列されている。

たとえば、民族の項の中久郎「『民族協和』の理想——『満州国』建国大学の実験」は、「八期生として入学した最後の学生」「在学期間わずか半年」である著者が、満州国の理想と現実の確執を建国大学の展開のなかにとらえようとしたものである。大学の教授陣のなかに皇国史観に拠る主流（現実）と民族協和を固有に追い求める若干の人々（理想）。もちろん、前者の優勢は否定しようもないが、後者は寄宿生活を送る漢、朝鮮、蒙古、ロシア、日本の学生の同窓社会のなかに根付き、生き続けていく。

女性の項には、蘭信三会員の「ある中国残留日本婦人のアイデンティティ」がある。長野県西筑摩郡榑川村の農家の長女幸子は、嫁探しに帰国した隣村出身の満州開拓団員S氏と結婚、翌々日昭和一六年二月に満州に旅立つ。順調な開拓時代、しかし二〇年、夫の召集によって生活は暗転する。そして、敗戦、難民生活、子供の死。しかし、「生きておれば必ず会える」という夫の言葉を信じて生き延びようとする。生き抜くために二一年、中国人と結婚。二八年の最後の集団引き揚げを、子供のために断念。翌二九年、日本からの手紙で夫がすでに復員しており、妹と結婚したことがわかり落胆。引き続き日本人として中国社会のなかで生きることを決意する……。幸子の生活史を赤い糸としてその時代と社会が立体的にえがきだされ、読む者の心を奪ってしまう。著者の長年にわたる開拓団の調査研究があったればこそと思う。それにしても、幸子が残留生活のなかで唯一の支えとした「日本人のアイデンティティ」に時代の悲劇を感じずにはいられない。

(岩崎信彦)